

愛媛県南宇和郡愛南町御荘焼陶片調査報告

第1章 はじめに

往時、愛媛県南宇和郡御荘町内で煙を上げていた「御荘焼（みしょうやき）」は、江戸時代末期の「長月窯（旧御荘町）」江戸時代末から明治時代かけて稼働した「緑岡窯（別称早崎窯 旧城辺町）」、同時期に開窯したと伝えられる「緑一木窯（旧城辺町）」、明治20年頃開窯し、大正時代まで存続したとみられる「豊田窯（旧城辺町）」の4窯からなるが、現在はすべて廃窯し窯跡を残すのみである。

これら4窯跡の「採集資料」と当該窯跡で生産されたとされる「伝世資料」は、同町内の個人コレクションである「南歴史文庫」と「町教育委員会」で保管されている。そのうち「南歴史文庫保管資料」については文庫長藤田儲三氏の御厚意により、平成27（2015）年5月15日から平成28（2016）年3月28日まで延べ28日間調査（観察・実測・写真撮影）を行い「町委保管資料」についても担当課の許可を得て同時期に調査を実施した。

現地調査の後、何度か中断しながら「実測図・写真の整理」「実測図のトレース・デジタル合成」「版下の作成」「原稿執筆」を行い、令和2（2020）年6月、最古の窯跡「長月窯」の報告がようやく完成した。なお、「実測図のトレース・デジタル合成」「（付載を除く）版下の作成」は社会福祉法人来島会ドローイング工房クラフトマンに依頼した。

第2章 御荘焼研究史

(1) 昭和13（1928）年 「長月焼の由来（久治兵衛焼とも云ふ）」

「愛媛県立南宇和農業学校」の校長であった菅菊太郎氏が、昭和13（1928）年に刊行した『伊予国南宇和郷土史雑稿』中の報告「長月焼の由来（久治兵衛焼とも言ふ）」が御荘焼研究の嚆矢とされる。

「同報告」を要約すると、

- ・文化8（1811）年、長月にいた紋之助という陶工が長月村庄屋清水善右衛門とともに奥大野で産出する砥石が陶石にも適することを確認し、藩主の許しを得て「砥石山」と呼ばれる場所に開窯した。
- ・文政3（1820）年、紋之助が31歳の時に生まれた長男久治兵衛は16歳の時から砥部で修業をし、天保9年（1838）陶工勇吾を連れて帰郷、長月に開窯した。
- ・19世紀の中頃、長月窯を閉じ緑村に移住し、安政3（1856）年30歳の時同地に開窯したが、経営状態が悪かったので、安政5（1858）年に藩主から銀札二十貫匁を借りた。（当該支払証書は久治兵衛の孫富岡遥知氏宅に残っている）これにより経営状態は良くなり製造量は増え、出来た陶磁器は宇和島袋町の亀屋焼物店で販売した。藩主からの食器の注文も多かった。
- ・明治になり久治兵衛は富岡喜内と改名した。

70歳を越えた頃、事情があり、早崎弁次に窯を譲って隠居した。その後、甥の稲田峰三郎を指導して明治20年代豊田窯（シャカダバ窯）を築き、明治33年81歳で亡くなった。

以上である。当該論考は、後出の「御荘焼関連論文・報告」全てで引用されている。

(2) 昭和36（1961）年3月1日 「御荘焼に関する一考察」 「陶説」3月号

昭和35年5月、日本陶磁協会佐藤進三、小森松庵両氏が宿毛市の愛陶家林淳氏宅に立ち寄った際、御荘焼の愛好者の集まりである御荘焼郷土研究会の会員達が御荘焼の伝世品、陶磁片を見せたことが契機となり、日本陶磁協会の機関誌「陶説」96号（昭和36年3月1日発行）に御荘焼郷土研究会名で「御荘焼に関する一考察」という「報告」が掲載された。

内容は、

「長月焼の由来（久治兵衛焼とも云ふ）」（以下「由来」と略）の引用に加えて、富岡喜内の孫富岡遥知の話として、

- ・御荘焼の開祖である紋之介はまず御荘町菊川に開窯し、その後砥石山に開窯したこと。
- ・「由来」では天保9年（1838）紋之介の長男久治兵衛は砥部で修業を終え、陶工「勇吾」を連れて帰郷したとされているが、連れて帰郷したのは「勇吾」ではなく「ヒロ」という名前の陶工であり、久治兵衛と父紋之介が「ヒロ」の協力で長月に開窯したこと
- ・富岡家の墓地のこと、製品の種類、釉薬、胎土、赤絵、クラワンカ茶碗（波佐見焼）との関連などが、記されている。

(3) 高橋城皓「伊予のやきもの-御荘焼-」『日本やきもの集成10 四国』平凡社 1982

主に「陶説」3月号の内容が引用されているが、御荘焼の歴史として、

- ・久治兵衛が父紋之助とともに天保9（1838）年に長月窯を開窯し勇吾、喜三郎、ヒロ（樋口姓）京都清水焼の職人も従事し「手描」「刷り」と「手描」「銅板刷」など手の込んだものを大量生産した。
- ・「御荘焼」の始まりが「由来」では文化8（1811）年の「砥石山窯」とされていたが「御荘焼郷土研究会」のその後の調査で天保9（1838）年開窯し、安政（1854）頃まで存続した「長月窯」に改められた。
- ・明治20（1887）年から昭和初年（1926）まで続いた早崎窯は、作業場は鶏舎として完全に残り、窯跡の一部と物原も残存し、窯道具、絵筆、筆筒、削道具などが伝えられていること。
- ・現愛南町4か所の窯跡に加え窯跡の場所は不明であるが久治兵衛の父紋之介によって開窯された御荘町「菊川窯」の存在が一説として伝えられている。

などが、紹介されている

(4) 吉田忠明「愛媛の焼き物」平成7（1995）年7月 愛媛文華館

内容は、

- ・「長月焼の由来（久治兵衛焼とも云ふ）」の引用に加えて「緑村（現愛南町平城）の旧村史」、文政11（1828）年完成された「御荘旧記」、藩政時代の宇和島に関する記録である「宇和島日記」、西園寺源透氏が編纂した「宇和島・吉田勸業制度」などの資料の調査により長月窯の開窯時期を天保9（1834年）と推定している。
- ・「愛媛県農商工統計年表、都市別陶磁器産額」の記録に明治35年には「南宇和郡内製陶所二戸」とあるのに対し、明治36年には「一戸」に減少していることから、早崎窯が明治36年に廃業し、豊田窯だけが残されたことが分かる。
- ・明治7（1874）年頃久治兵衛が早崎弁次に緑窯を譲った時、同窯の陶工だった金平金太郎が独立して緑村一木谷に「緑一木窯」を築窯したものの短期間で廃窯になったことを久治兵衛の後裔である「富岡家の文書」と「緑村知恵光寺の過去帳」から導き出している。

以上に加えて窯跡の場所、見取り図、採集製品写真、伝世品の分析など、多方面に渡る内容が記されていて、御荘焼研究の集大成という感がある。「菊川窯」については否定的な意見を述べている。

(5) 藤田儲三氏の調査活動

南歴史文庫長藤田儲三は昭和40年代から4窯跡の散布資料の採集と伝世資料収集を実施、自宅の一室を改造して、収納棚を作り収納品を保管し、町教委への資料寄託、町内展示施設への貸出し等、御荘焼が貴重な文化財であることの周知活動に取り組んだ結果「緑岡窯」「緑一木窯」「豊田窯」は昭和39（1964）年に町指定有形民俗文化財、「長月窯跡」は昭和45（1970）年に町指定史跡に、上記4窯の採集資料も平成8（1996）年5月14日に町指定有形民俗文化財に登録された。

藤田氏は御荘焼の全体像を示すパンフレット類を数多く発行しているが、その中で、以下の新知見を記している。

- ・久治兵衛は連れてきた砥部の陶工「ヒロ」は樋口富蔵（明治12年没）ではないか。
- ・安政3（1856）年「長月窯」を廃し「緑一木窯」を興したが、その後「緑岡窯」に移ったため「緑一木窯」は活動休止した。明治に入り地元の豪農埜下氏の援助で再興したが、明治35年に頃また休窯。大正末期か昭和初期、金平金太郎により再興され、印判の下手物が焼かれた。

「御荘焼と陶祖久治兵衛」『南予の文化』第8号 平成元年3月23日 「史談 御荘焼の歴史」U-ゆう-いよ・とさ ふるさと会報 平成4年2月20日 第14号 「南宇和歴史散歩」愛媛新聞 平成5（1993）年2月7日 「愛南町の文化財」平成21（2009）年3月5日 愛南町教育委員会 『愛媛の文化財御荘焼』南宇和歴史民俗文庫

第3章 長月窯関連資料について

第1節 報告資料概要

今回報告する長月窯関連資料は3グループに分かれる。最も量が多いのは南歴文庫が管理している「南歴文庫保管資料」（以下「南歴」と略）で、窯跡採集資料（製品のみ）198点、伝世資料24点からなる。

「教育委員会保管資料」は整理用コンテナで保管されている資料（以下「教委1」と略）とダンボール箱で保管されている資料（以下「教委2ダンボール箱」と略）の2群からなる。「教委1」の数量は窯道具20点、窯壁3点、製品33点。「教委2ダンボール箱」は窯道具4点、窯壁1点、製品8点からなる。

「南歴」の採集資料は藤田氏により窯ごとに分類され、一部ではあるが日付・窯名のマーキングがあり、資料としての有効性は高いが、教育委員会の2資料については、「長月窯採集品」と伝えられているだけで、採集した人や教委に持込まれた年月日も分からず有効性が低い。

とはいっても、数少ない御荘焼関連資料であり、「南歴」にはない「窯道具」も含まれているので、製品については「南歴」資料と対比させ、窯道具については県内諸窯の採集資料などと比較しながら慎重に分析を進めたい。

個別遺物に関する詳細な観察は「遺物観察表」で行っているため、本項では「遺物の特徴」「他窯との関連」等について記述することにした。

なお、多くの「長月窯関連資料」の分類・編年については、

石岡ひとみ「砥部焼窯出土の製品について」東洋陶磁 2009-2010 VOL.39 東洋陶磁学会

を援用している。その理由については「第6節 まとめ」で説明したい。

第2節 「南歴」関連資料（採集資料）

(1) 陶器片 (1-1～2-19)

図版1 遺物番号1（以下1-1と略）から2-19までは陶器製品で総数は23点ある。「第2章」で紹介した「文献資料」には、御荘焼の陶器焼成について記載がない。

・土瓶 (1-1～3)

1・2は胴体が算盤の玉のような形状の「算盤玉型土瓶」で、1は焼成不良で釉がよく溶けておらず、内面に藤田氏が長月の「長」の字をマーキングしている。3は焼成が不良で釉が溶けていない。

・行平蓋、蓋物蓋 (1-4・5)

4は行平土鍋の蓋である。焼成が不良で釉が溶けていない。5は口径が16.2cmの「大型蓋物の蓋」で外面に錆絵で字が書かれている。

・鉢 (1-6～12 2-13)

6は口縁部、7・8は体部、9～12は底部である。8は焼成良好だが、7・9は焼成不良で釉が溶けていない。9・11には高台が付くが10は平底で、高台内に「長」のマーキングがある。

12は「胎土目による重ね焼き」「扇型・小豆型の窪みに白土を埋めた象嵌が底部内面にある」等18-19世紀の「武雄唐津系大鉢」と同様の技法で、胎土は灰色で硬く、内面に「長」のマーキングがある。2-13は、鉢体部片4点である。

・しのぎ皿 (2-14)

2-14 は口縁がしのぎになった稜花皿である。

・播鉢体部片、器種不明鮫肌体部片 (2-15・16)

15 は外面に「長」のマーキングがある。16 は砂を付け鮫肌状になった器壁（表面）を持つ不明器種体部片である。裏側に「長」のマーキングがある。

・足付灯明台・乗燭 (2-17～19)

17 は足付灯明台に灯明皿が溶着したものである。18 は乗燭で底部外面に「長」のマーキングがある。19 は足つき灯明台の口縁部である。

(2)磁器片 (2-20～10-141)

①碗・蓋類 (2-20～6-86)

・染付広東碗 (2-20～3-30)

20 は歪んでいて、外面は浦の苫屋文。21 は外面に花文、内面に「長月」のマーキングがある。22 は底部片。23～28 の外面は二重格子文を描く。23 の見込銘は斜格子。24 の見込銘は井桁。25 の見込銘は千鳥文。26 の見込には「長」のマーキングがある。27・28 は口縁部の残存。29 は外面多重格子文の広東碗と外面椰子葉文の碗、窯壁の剥離片が溶着している。3-30 は外面、見込銘共に蝙蝠文。呉須は薄く発色もよくない。3-31 は口径の小さい小広東碗、外面は秋草文である。

・染付碗 (3-32～34)

32 は外面文様不明、見込に銘がある。33 は口縁部のみの残存で外面は水辺文、端部内面に多重圏線が描かれる。34 も口縁部のみの残存で外面は水辺文。

・染付碗 (3-36～39)

36 は見込に「蛇目釉剥」がある。37 は全体にへたって変形していて、外面に菊水文を描き、見込には銘がある。38 は外面二重格子文碗で見込に銘がある。39 は外面二重格子文碗の口縁片 7 点で 1 点は 2 つの片が溶着していて内面に「47. 6. 24」の赤色マーキング、2 点は内面に「長」のマーキングがある。

・井桁・菱の実文碗(3-40～42)、同小片 (43)

40 は外面に井桁文があり、写真では隠れているが菱文もある。見込に「長月」のマーキングがあり、41 は外面に菱文、42 は外面に井桁・菱の実文を描く。43 は外面に井桁文・菱の実文を描く碗の口縁部小片 5 点である。

以上の「菱の実文」の菱は文様化されたものではなく「実際の菱の実」の特徴である「角から棘状の細い突起が出ているところ」を写している。

・亀甲文碗 (4-44)、亀甲文端反碗 (45)、亀甲花文碗(46)

44 は見込の蛇目釉剥に赤色で「長月」の赤色マーキングがある。45 は口縁端部内面二重圏線、外面多重圏線を描く亀甲端反碗である。46 は焼成時に大きく変形し、製品・窯道具が溶着している。外面は小さな花文+亀甲文様で裾部には蓮弁文が描かれる。内面に「46. 1. 16 長」のマーキングがある。

・浦の苫屋文小型丸碗 (4-47)

47 は外面の絵が非常に丁寧に描かれている。

・染付端反碗 (3-35)

口縁端部が小さく外反する碗で内面は二重圏線 外面口縁端部、多重圏線、中位に蔓草文、裾部には圏線が描かれる。内面に「45. 6. 26」の赤色マーキングがある。

・浦の苫屋文端反碗(4-48～52)

48 は口縁端部が外反する端反碗で、外面口縁端部に崩れた雷文が描かれる。49 は内面に「長」のマーキングがある。50

は内面圏線を描く。52 は見込に帆掛船の銘がある。

・浦の苫屋文碗小片 (53)

53 は網干・帆掛船など「裏の苫屋文」のモチーフを外面に描いた碗の細片 4 点である。

・幅広葉+梅花文端反碗 (54)、椰子葉文碗小片 (55)

内外面圏線、内面見込に「長月」のマーキングがある。外面に幅広葉と梅花が重なった文様が描かれる。55 は外面に椰子葉文を描く染付小片 3 点で 1 点は外面口縁端部に多重圏線があり、1 点は「長」のマーキングがある。

・縫糸文端反碗 (56・57)

56 は外面縫糸文の端反碗で、見込に「長月 43.1.16」のマーキングがある。57 は外面縫糸文碗の小片 3 点である。

・蝙蝠文端反碗 (4-58・59)

58 の内面は柳文、見込の銘は蝙蝠文、外面は柳に蝙蝠文を描く。59 は焼け歪みに変形している。内面に「長月」のマーキングがある。外面は蝙蝠・椰子葉文。

・傘文端反碗 (5-60)、傘文碗小片 (61)

5-60 は外面に傘文を描く。61 は傘文端反碗の小片 2 点である。

・染付端反碗 (5-71~73)

71 は見込に銘があり「口縁端部に口錆のある染付片」が内面に溶着している。72 はやけ歪みでかなり変形している。内面には赤色で「47.6.24」のマーキングがあり、外面に葉文を描く。73 も焼け歪んで変形していて、外面には斜めの暦文風文様を描く。

・染付端反碗 (5-76~79)

76 は内面見込には井桁の銘がある。外面に上端・裾部に縫糸文、中位に鳳凰を描く。77 は外面に 2 段の簾文があり、見込には銘と「長月」のマーキングがある。78 は内面二重線で区割りされ秋草・花格子が、外面は唐草文が描かれる。79 は内面口縁端部圏線、外面は「竹に蝙蝠文」が描かれる。

・染付碗 (5-62・63・67)

5-63 は外面に丸文を描く碗である。67 は焼成不良で釉が全く溶けていない。見込に蛇目釉剥がある。

・染付端反碗 (5-64・65)

64 は外面に呉須を塗り白く窓抜きした「窓絵」の碗である。窓には上絵を付ける予定があったかもしれない。65 は口縁端部内面二重圏線、外面多重圏線の端反碗である。

・染付網目文碗 (5-66)

66 は外面に網目文を施す染付碗の細片である。

・染付深小丸形碗 (5-68~70)

68 は外面に鳥籠に秋草文。69 は外面に花文。70 は内面には「長月」のマーキング、外面に草花文「寺」の文字がある。

・染付小片 (5-74)

外面に網目文を描く。

・染付朝顔型碗 (5-75)

内面見込に銘あり、外面圏線。

・網目文碗 (5-81・82)

81 は内面口縁端部圏線、82 は小片 2 点で内外面圏線。

・染付碗小片 (83)

小片の点数は 14 点である。

・染付広東碗蓋 (6-84~86)

84の外面雪持笹文、銘は内外面とも同じもので「蕨」の図案化か。85は外面に鯛と七宝、内面の銘は宝珠。86は外面梅文、つまみ内に「長月」のマーキングがあり、内面の銘は花文である。

②皿類 (6-87~9-125)

・波佐見風 (くらわんか手) 染付深皿 (6-87・88)

87は深皿で内面芭蕉文、外面竜唐草。88は、内面草花文、銘はスタンプの五弁花、外面銘は渦「50.10.7」のマーキングがある。

・染付深皿 (6-89~98)

89は染付皿であるがやけ歪みによる変形が激しい。外面に赤で「47.6.24」のマーキングがある。90は内面に雲文を描く。91の内面はよろけ縞文、底部高台内に蛇目釉剥がある。焼成はやや悪く黄味を帯びる。92も焼成はやや悪く、内面によるけ縞と放射状文。銘あり。外面底部蛇目釉剥、高台内に赤色の「長」のマーキングがある。93は外面底部蛇目釉剥である。94は外面に井桁文を描く皿である。95は内面に笹文を描く皿の小片3点である。1点の外面に赤で「47.6.25」のマーキングがある。96は内面に楼閣を描く皿である。底部外面高台内蛇目釉剥。中央部に赤で「長」のマーキング有り。97は内面中央に雪持笹文、周囲は笹文を描く皿である。外面底部は高台内蛇目釉剥でハマの溶着痕がある。98は内面芙蓉文の皿で、外面底部は高台内蛇目釉剥で「長月」のマーキング有り。

・浦の苫屋文深皿 (7-99~106、8-107)

99の内面は「帆掛船のある浦の苫屋文」、外面底部高台内は蛇目釉剥である。100の内面は浦の苫屋文、外面口縁部輪違文、底部高台内は蛇目釉剥である。101は口縁端部口鏝、内面浦の苫屋文、外面口縁部唐草文、底部高台内は蛇目釉剥である。102は口縁端部口鏝、内面浦の苫屋文で「脚付ハマ」の溶着痕あり、外面口縁部折松葉文、高台内は蛇目釉剥である。103は内面浦の苫屋文、底部高台内は蛇目釉剥である。104は口縁が端反る深皿で、口縁端部口鏝、内面浦の苫屋文、外面口縁部折松葉文、高台内は蛇目釉剥。105は口縁端部口鏝、内面浦の苫屋文、外面口縁部折松葉文、高台内は蛇目釉剥である。106は口縁が端反る深皿で、内面浦の苫屋文、外面口縁部竜唐草文、高台内は蛇目釉剥である。8-107は、内面に浦の苫屋文を描く深皿の細片12点である。1点の外面高台内に「長」のマーキングがある。

・唐草文深皿 (7-108・109)

108は外面口縁部竜唐草文を描く。109は底部に染付片が溶着していて、口縁端部は口鏝、内面口縁部花唐草、見込に千鳥文の銘、外面口縁部竜唐草、底部高台内は蛇目釉剥、赤で「44.6.24」のマーキングあり、同じ文様の細片が1点ある。

・二重格子文深皿 (7-110・111)

110は内面二重格子文、外面竜唐草文の深皿である。111は内面二重格子文皿の細片4点である。2点に赤色のマーキング「47.6.24」「47.6.25」がある。

・葉文深皿 (8-112)

112は口縁端部口鏝、内面葉文で製品が溶着している。外面は唐草文「長月」のマーキングがある。

・染付輪花深皿 (8-113~118)

113は口縁端部口鏝で、内面は浦の苫屋文であるが、富士山と帆掛船があるので、田子の浦の様子を表しているのか。底部高台内は蛇目釉剥があり「長月」のマーキングがある。114は内面浦の苫屋文、外面竜唐草、底部高台内蛇目釉剥、赤色で「44.6.25」「長月」のマーキング有り。115は口縁端部口鏝、内面浦の苫屋文、外面竜唐草、底部高台内、蛇目釉剥。116は口縁端部口鏝、内面浦の苫屋文、外面竜唐草。117は口縁端部口鏝、内面浦の苫屋文、外面竜唐草。118は口縁端部口鏝、内面浦の苫屋文、外面竜唐草、底部高台内蛇目釉剥である。

・染付ひだ小皿 (9-119・120)

119・120 は口縁端部に細かい刻み目があり、119 は口縁端部口鏝で内面梅文。120 の内面は 119 と同じタッチの梅文で同一製作者の作か。

・染付輪花小皿(9-121)

121 口縁の襷が中心部近くまである。内面中心部に呉須で大きな点が描かれる。

・白磁輪花小皿(9-122・123)

122 は内面の襷が大きい。123 は底部高台内に蛇目釉剥がある。

・染付輪花深皿片・染付皿小片(9-124・125)

輪花深皿片(124) は 10 点、染付皿小片(125) は 2 点ある。

③その他の器種(9-126~10-141)

・染付八角鉢(9-126、127)

126 はやけ歪みによりひどく変形している。内外面の文様は芙蓉手状である。127 の内面文様は芙蓉手状、見込は傘文様で、窯道具(円盤)と製品が溶着している。

・染付六角小鉢(9-128)

128 は内面浦の苫屋文、外面遠山文である。

・白磁鉢(9-129)・染付銚子(9-130)・白磁徳利(9-131)

129 は口縁端部が外反し、狭い面を持つ白磁鉢である。130 は肩部に草文を描く。131 は頸部と口縁部が残存している。

・染付徳利(9-132)・青磁花瓶(9-133)

132 は底部のみ残存している。133 は口縁端部が上方に摘み上げられている。

・御神酒徳利(9-134~137)

神棚に備える徳利で、134 は外面に呉須で「奉献」と書き、裏面に「44.6.25」のマーキングがある。135 は外面に呉須で「奉」の字、その下に宝珠が描かれる。137 は広東碗と溶着している。

・その他(9-138~140・142、10-141)

138 は染付香炉の口縁部である。139 は子供のおもちゃの一種「つぼつぼ」である。肩部にかかった釉薬は溶けず白濁している。140 は神棚に置く花立である。142 は陶石ではないかと思われる小石片である。10-141 は染付小片 15 点。

第3節「南歴」関連資料(伝世資料 10-1~13-24)

藤田儲三氏は窯跡散布資料の採集と並行して、町内の旧家に伝わる長月窯伝世資料の収集も実施している。

・染付蕎麦猪口(10-1)

口縁内面は四方襷文、見込の銘は昆虫文。外面口縁部には松竹梅、鶴の絵が丁寧に描かれ、底部外面は蛇目釉剥がある。

・染付三重格子文端反碗(10-2)

見込の銘は千鳥文で採集品にもみられる。外面は三重格子文で高台は高い。

・染付浦の苫屋文ひだ小皿(10-3~13)

口径の大きさ、文様の違いにより 2 種に分けることができる。

小(口径:平均 9.1 cm 3~7) 5 点は口縁端部口鏝で、内面は浦の苫屋文。中央に東屋があり、右の「網干」奥に「遠くの島」を配置する。

大(口径:平均 10.3 cm 8~10) 3 点の口縁端部は口鏝、内面は浦の苫屋文。「網干がない」「東屋の屋根が切妻」「絵の手前に空白がない」などが特徴である。

・染付浦の苫屋文輪花深皿(11~13)

口径の平均は 13.0 cm で、口縁端部は口鏝、内面は浦の苫屋文(網干が右で、帆掛け船がある)のが特徴である。

3～13については「奥の島」「中央部の東屋」が共通するモチーフで、また作りは丁寧で高級感がある。

・染付五弁花墨弾き文皿 (11-14～12-18)

5点の口径は平均17.0cm、内面口縁部は濃淡2種の呉須を墨弾きで区切り雲文様にしている。内面の五弁花の銘も丁寧に描かれている。外面口縁部は竜唐草文、高台内には3箇所「脚付ハマ」の熔着痕がある。作りも丁寧な高級品である。18は底部外面に「藤田」のマーキングがある。

・染付銚子・染付油壺 (13-19・12-20)

銚子(19)は採集品に類似品(9-130)があり、肩部に垣根と草文が描かれる。底部は無釉、作りは薄手で手持ちは軽い。油壺は呉須の発色が悪く、釉も黄味を帯びている。肩部に梅文がある。

・白磁徳利 (12-21) 染付大型徳利 (13-22) 白磁大徳利 (13-23) 染付大徳利 (13-24)

21・23は採集品に類似品がある。22は、肩部に梅文、体部に竹石が描かれる。24は「長月村」「梶田姓」の文字が2面に書かれる。ひび割れを漆で修復している大型の徳利で「預け徳利」と思われる。

第4節「教委分1」資料

窯道具20点、窯壁3、製品33点からなり「南歴」資料にはない窯道具を含んでいる。

(1) 窯道具・窯壁 (14-1～15-23)

・ツク (14-1)

窯詰の際、製品や「ナンキン等」を載せる「蛸足ハマ」を「下支えする柱」がツクの役割で、1はその上半部である。

・ナンキン (14-2～4)

ナンキンは窯詰の際「窯床」や「蛸足ハマ」の上に置き、製品を載せる台の役割をする。大型のもの(2)、小型のもの(3・4)があり、3は底部外面の内割りが浅い。

・蛸足ハマ (14-5)

「蛸足ハマ」のは、窯詰の際「ツク」の上に置き、4本ある脚部の上面に「製品」や「ナンキン」等を載せる役割がある。5は脚部の下部と下部中央の窪みに成型時の布目痕が残る

・ハマ (15-6～14)

ハマは焼成時、製品を載せる「台」として用いる窯道具である。大・中・小の3種がある。

大(15-6 口径:10.8cm)は上部に高台痕が残る。中(7～10 口径平均:7.0cm)も上部に高台痕が残る。

小(11～15 口径平均:6.0cm)の内11・12・14は上部に高台痕が残る。

・足付ハマ (15-15)

上部に窪みがあり下部に針ピンが輪状に9個配置されていたが、すべて欠落し痕だけが残っている。

・円盤 (15-16～20)

ハマと同様、焼成時に製品を載せる「台」として用いる窯道具である。大(16 口径:6.0cm 厚さ1.65cm)は磁質で上部に高台痕、下面に砂付着。小(17～20 口径平均:5.35cm)は上部に高台痕が残る。

・窯壁 (21～23)

21・22は一面がガラス化している。

(2) 製品 (16-24～17-48)

① 陶器片 (16-24～26)

24は土瓶の把手である。型抜きで作られている。25は乗燭である。26は18-19世紀の武雄系大鉢を思わせる陶器鉢である高台の内割りが深い。見込に重焼き時の砂目がある。

② 磁器片 (16-27～17-48)

・染付端反碗(16-27・28、30、17-35~38)

27 は外面に井桁と菱文を描く端反碗で内面見込は蛇目釉剥がある。28 は外面に帆掛船など海辺の風景を描く端反碗である。30 は外面に「幅広葉+梅花文」を描き、底部外面は露胎である。17-35 は外面に浦の苫屋文を描く端反皿である。内面に同形の染付碗が溶着している。36 は焼け歪んで変形している。内面見込に銘がある。37 は内面見込に銘がある。外面は窓絵と松林文が描かれる。外面は水車と網目文。38 は全体に焼け歪みが大きい。口縁端部外面に多重圏線、その下に椰子葉文を描く。

・染付碗(16-29、31~33、17-39~42)

16-29 の外面は亀甲文で内面見込に銘がある。焼成は不良で釉は溶けていない 31 は染付碗と思われるが焼成不良で釉が溶けておらず、文様の判別はできない。32 は外面亀甲文の碗で、内面見込に蛇目釉剥がある。33 は碗の底部である。17-39 は内面に見込に蛇目釉剥あり。外面に菱の実文を描く。40 は染付碗の底部である。内面見込に蛇目釉剥がある。41 は外面に蝶文を描く碗である。42 は外面に帆掛船を描く碗であるが、やけ歪みにより変形している。

・染付朝顔形碗(16-34)

34 は底部と口縁部の境に稜を持つ碗である。

・染付蓋(17-43)

43 は染付碗の蓋で、内面中央に銘があり、外面は「幅広葉+梅花文」の組み合わせが3セット描かれる。

・染付深皿(17-44、46)

44 は内面に草花文が描かれる。焼成が悪く釉はよく溶けていない。46 の底部高台内は蛇目状露胎である。

・染付輪花深皿(17-45、47)

45 は口縁端部口鏝で見込は浦の苫屋文、底部高台内は蛇目釉剥。47 は見込草花文で底部高台内は蛇目釉剥である。

・染付小片(17-48)

染付小片は9点ある。

第5節(教委分2)ダンボール箱

当該資料は(教委分1)同様、寄贈者、収蔵時期、合併以前の町の所蔵品であったのかなどは不明。内容は窯道具4点、窯壁1点、製品8点で、ダンボール箱に入った状態で寄贈されている。本報告に伴う整理後も元のダンボールに入れて返却し、そのまま保管が継続されているので、分類名として「ダンボール箱」を加えた。

(1) 窯道具・窯壁(18-1~5)

1 はツクである。上下端と柱部を別に作り結合させ、柱部の中央がやや膨らむエンタシス型をしている。上端にアルミナ状の泥を塗布している。2 は蛸足ハマである。下部と窪みに成型時の布目が残る。3、4 はハマで3の口径は7.8 cm、高さは1.85 cm、4の口径は7.6 cm、高さ1.5 cmである。

5 は内面が高熱のためガラス化している。

(3) 磁器製品(19-6~19-13)

・染付端反碗(19-6) 染付端反碗(7~9)

6 の外面には井桁文と菱の実文を描き、内面見込に蛇目釉剥がある。7 は焼歪みがひどく変形している。外面浦の苫屋文の碗である。8 は染付碗で内面見込に銘があり、やけ歪んで潰れている。9 は外面草花文の染付碗であるが、焼成不良で釉が溶けていない。

・染付深皿(19-10、12、13)

10 の口縁端部は口鏝、内面口縁部二重格子文、見込草花文、外面口縁部折れ松葉文、底部外面高台内蛇目釉剥である。12 は見込浦の苫屋文、底部外面高台内蛇目釉剥の皿。13 は外面は浦の苫屋文、やけ歪んで口縁はゆがんでいる。

・染付輪花深皿(11～13)

11 は染付輪花深皿で内面口縁部笹文、見込崩れた草花文、外面口縁部折れ松葉文、底部外面高台内蛇目釉剥で、やけ歪みがひどく変形している。

第6節 まとめ (挿図の縮尺不同)

①はじめに

「肥前を中心とした北部九州窯陶磁器生産窯群」の生産技術が「砥部焼」に導入され、さらに「長月窯」に移されるので、三地域の「窯道具・製品の形状」や「装飾技法」に共通点があることは当然のことであり「長月窯関連資料群」もその多くが「2 地域の関連資料群」と「形状や技法」が類似している。

そこで、以下の報告における「分類・編年」については、

- ・「九州陶磁の編年」-九州近世陶磁学会10周年記念-同学会発行 2002年2月
- ・石岡ひとみ「砥部焼窯出土の製品について」東洋陶磁 2009-2010 VOL.39 東洋陶磁学会

を、使用することとした。

石岡ひとみ氏の砥部焼分類・編年については、度々引用するので以下に概略を示しておきたい。

- ・Ⅰ期(1775～1810年代) 砥石屑から磁器が焼成開始された時期。広東形碗・小丸形碗は18世紀末に出現した可能性がある。皿や碗の見込に「蛇目釉剥」痕がつくものが多い。
- ・Ⅱ期-前期(1820～40年代) 広東形碗を主体に生産し、30年代末には端反碗が出現している可能性がある。大下田1号の操業期。原料には砥石屑を使っていた可能性あり。皿や碗の見込は「蛇目釉剥」痕と「足付ハマ」痕がある。
- ・Ⅱ期-後期(1850～70年代) 広東形碗の生産が終了し端反碗や白磁菊皿が主体に生産される時期。川登陶石を使用した白色の製品を量産。口縁端部外面に多重圏線を描く端反碗あり。菊皿の見込に「足付ハマ」痕がある。「蛇目釉剥」も残る。

編年について「付載」の文中では「Ⅰ期」「Ⅱ期前期」「Ⅱ期後期」と略記する。

さて、整理調査を進めると「長月資料群」中に「器形や装飾技法が砥部焼と類似する一群」とは別に「砥部焼と異なる独自の器形や装飾技法を示す一群」があることが確認できた。

「長月資料群」は、同窯の窯道具・製品すべてを網羅しているわけではないし「2地域の関連資料群」の中にも管見から漏れたり未確認のものがある可能性も高く、現時点で「類似する一群」と「異なる一群」両方を提示することの危うさも考えられたが、後世、長月窯の発掘調査が実施され「新出資料群」が整理された時「本報告資料群」が「新出資料群の欠落部分を埋める何ピースかになれば幸い」という思いで両方の報告を行うこととする。

②砥部焼と類似する資料-窯道具-

・ツク(14-1-挿図1-) (18-1)

「円柱を作り」「その上下端にハマを逆位にして接着する」という「製作手順」で作られ、器形は柱の中位が膨らむエンタシス状になる。砥部焼「大下田1号窯」出土の「ツク」も同じ製作技法で作られている。

・足付きハマ(15-15-挿図1-)

当該窯採集中1点確認できる。同ハマの痕跡がある製品も深皿(7-102)も確認されている。砥部焼ではⅡ期後期に同形の「ハマ」が見られる。

・蝸ハマ(14-5-挿図1-)

「大下田1号窯」の「蝸ハマ」は「下部の中央穴」と「脚部下面」に成型時の「布目痕」があり、同様の「布目痕」を残す近世瓦と同じ技法(型に布を敷き、粘土を押込んで型取し、布を持ち上げて型から出す)が応用されている。

長月窯の窯道具にも「下部の中央穴」と「脚部下面」に成型時の「布目痕」があることから、瓦製作技法で製作されたことは間違いない。



14-1



14-5



15-15

挿図1 長月窯の窯道具(砥部と類似する資料)

・足付きハマ (15-15-挿図1-)

当該窯採集中 1 点確認できる。同ハマの痕跡がある製品も深皿(7-102)も確認されている。砥部焼ではⅡ期後期に同形の「ハマ」が見られる。

③砥部焼と類似する資料-陶器-

「南歴」「教委 1」の採集資料中の陶片には土瓶、皿、行平、土鍋等の陶器がある。「大下田 1 号窯」にも同様の製品があり、両窯は陶磁生産窯(陶器・磁器両方が生産された窯)であったことが確認できる。



挿図2 深皿 7-102

④砥部焼と類似する資料-磁器-

・染付朝顔形碗 (16-34-挿図3-)

肥前では 1750 年代～1780 年代に生産されていて、砥部では開窯当初のⅠ期に見られる。長月窯採集資料には少ない。

・染付広東碗 (2-20-挿図3-)・同蓋 (6-84～86)

肥前では 1780 年代に出現し、1820 年代以降多様化する。砥部焼では上原窯・大下田窯等で、Ⅰ期からⅡ期前期にかけて生産され、Ⅱ期後期には見られなくなる。

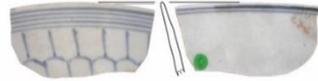
天保 9 (1834 年) 開窯の長月窯でも同蓋とともに採集されている。外面の文様「浦の苫屋文」「二重格子文」、見込の銘「千鳥文」「二重格子クロス」は砥部と共通する。

・染付丸碗(3-31～34、36、4-47)

口縁部が内湾する碗で、肥前では 1650 年代～1680 年代に出現するが、砥部に影響を与えたのは 1750 年代～1770 年代に大量生産された波佐見系磁器(17 世紀末から 19 世紀にかけて長崎県波佐見町で大量生産された日常雑器)の丸碗で、Ⅰ期によく見られるが、Ⅱ期になると減少する。



2-20



4-45



4-56



5-68



7-601



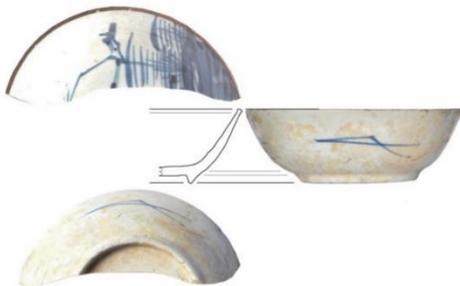
8-115



6-34



17-45



7-105



9-122

挿図3 長月窯の製品(砥部と類似する資料)

・染付端反碗 (4-45・56-挿図 3-)

口縁端部が外反する碗で、北部九州諸窯では 1820 年代～60 年代に出現する。砥部焼では **Ⅱ期前期**に出現し、**Ⅱ期後期**になると口縁端部外面に多重圈線を描く碗が出現する。

長月窯では砥部焼同様「浦の苫屋文」「唐草文」「網目文」描く碗と口縁端部外面に多重圈線を描く碗が見られる。

・深小丸形碗 (5-68-挿図 3-)

波佐見焼諸窯では、江戸時代末から明治期にかけて生産され、砥部・長月でも生産されている。

・深皿 (7-101・17-45・7-105-挿図 3-)

長月窯採集の大半の深皿は口縁が緩やかに立ちあがる形状(17-45)か口縁端部が外反する形状(7-105)であるが、(7-101)は口縁がほぼ直立する形状である。これは **I期**に見られる深皿で、長月窯採集品では唯一のものである。

・輪花深皿 (8-113-挿図 3-)

砥部焼では、**Ⅱ期前期**の輪花深皿は見込に蛇目釉剥がないが、**Ⅱ期後期**になると見込に蛇目釉剥を施すようになる。長月窯の採集資料中の輪花深皿は見込に蛇目釉剥がない。

・白磁稜花小皿 (9-122-挿図 3-)

砥部では **Ⅱ期後期**に見られるが、長月窯では白磁 (9-122) と少し呉須を加えるもの (9-121・123) がある。

・共通する文様

「浦の苫屋文」は肥前に起源があり、砥部では広東碗、丸碗、端反碗などに描かれる。

長月窯でも広東碗、丸碗、端反碗、深皿(7-105-挿図 3-)、輪花深皿(17-45-挿図 3-)など多くの器種に描かれ人気の文様であったことがうかがえる。

「手前の海辺」と「奥の島影」を対比させる構図も、肥前・砥部・長月で共通している。

「二重格子文」は、1820 年代～1860 年代の波佐見系磁器窯から砥部に伝わった文様で、長月でも碗・皿に描かれる。

亀甲文は砥部では **I期**から **Ⅱ期**にかけてみられる文様で、口縁端部に多重圈線が描かれる例 (4-45-挿図 3-) がある。縫糸文(4-56)も砥部と長月に共通する文様である。

⑤砥部焼にない資料-陶器-

・陶器大鉢

(1-12-挿図 4-)は、見込に白土の象嵌が 2 箇所あり(16-26-挿図 4-)は高台の内割りが深い。

両者は 18 世紀から 19 世紀にかけて肥前(佐賀県)武雄系諸窯で生産された陶器大鉢に器形・装飾技法が類似することから北部九州の技術系譜を引くものと思われるが、砥部焼では現時点では確認されていない資料である。

⑥砥部焼にない器形・文様-磁器-

・菱文、井桁文(19-6-挿図 4-)

端反碗、丸碗に見られる文様で、口縁部外面に井桁文と並んで描かれることが多い。

家紋のように定型化された菱文ではなく、四方の角が細くなり伸びている。これは実際の(菱の実-挿図-5)を写した長月窯独自の文様といえる。

・銚子 (13-19-挿図 4-・9-130)

地元で銚子と呼ばれる水注ぎで、肩部に文様が描かれる。「南歴」資料中には採集品と伝世品がある。



1-12



16-26



4-54



4-55



5-60



4-58



13-19



19-6

挿図4 長月窯の陶磁器（砥部焼にない器形・文様）



・その他特徴的な文様

傘文(5-60・61-挿図4-)、椰子の葉文(4-55-挿図4-)、幅広葉+梅花文(4-54-挿図4-)、蝙蝠文の銘(4-58)は長月窯特有の文様である

⑥波佐見系染付磁器皿に似た皿(6-87・88)

いずれも深皿であるが、1750年代～1860年代にかけて作られた波佐見系染付磁器皿に似ている。

挿図5 菱の文 88は見込にコンニャク印の五弁花があるが、砥部ではコンニャク印の五弁花確認されていない。
2点は、内面・高台内に蛇目釉剥がなく文様のタッチも肥前製品によく似ている。

⑦小結

「長月窯の由来(久治兵衛焼とも言ふ)」に記された「砥石山の窯」や富岡遥知氏からの聞き取りに出てくる「菊川窯」の窯跡が確認されていない現在、九治兵衛が天保9年(1838)に開窯した「長月窯」が御荘焼の嚆矢であると言える。

九治兵衛の砥部修行時期は**砥部焼Ⅰ期**(1775～1810年代)を含むが、技術移転をして開窯した時は**Ⅱ期前期**(1820～40年代)にあたる。そのため**Ⅰ期**製品に似た採集品は少なく、**Ⅱ期前期**の砥部焼製品に似たものが多い。

また、開窯後の**Ⅱ期後期**に似た製品が見られることは、砥部焼で流行している形状や文様に注目し、適宜取り入れているからではないだろうか。

九治兵衛の仕事ぶりについて「長月窯の由来(久治兵衛焼とも云ふ)」には、

「九治兵衛は非常に勤労家で、月窯と云って必ず一月に一回は焼くことにしてゐたが、こんな場合は品が揃はないと夜もろくろく寝ずに仕事を続け、眠くなると眼に「カラシ」を塗って模様を画いたと云ふことである。励精したので、やがて非常に精巧な陶器を製作するやうになり、十年も立たぬうちに、大資産をつくり、土地の人々にも金の融通をするようになった」

と記されている。

砥部Ⅰ期・Ⅱ期前期の製品は砥石屑を原料にして作られたことから、灰色の素地を隠すために、白化粧された施されたものが多いのに対し、長月窯の素地は不純物が少ないので色が白い。文様の線も細く、絵付けも丁寧である。

また、砥部にはない独自の文様(菱文、椰子葉文、幅広葉+梅花文)が描かれた器から「修行の地砥部」を越える製品作成に挑戦する九治兵衛の「藍より青く」の意気込みを感じるが、いかがであろうか？

御荘焼は4窯跡が残されているが、最古の「長月窯」の報告をようやく終えることができた。

現在、緑・岡窯の調査データの整理を行っている。不備のないよう慎重に作業を進めて行くので、報告ができるのは数年後になるかと思われる。

「長月窯」の報告を終えるにあたり、調査に御協力いただいた南歴文庫長 藤田儲三氏、愛南町教育委員会に深く謝意を表したい。

令和2年6月30日

御荘焼長月窯資料一覧表(南歴文庫蔵)

採集資料(陶器)

遺物番号	遺物名	法量(cm)			色調			焼成 胎土	特徴	個数
		口径	高台径	器高	釉の上から	呉須	露胎			
1	土瓶				10YR7/3			不良 釉が熔けていない 緻密	算盤玉型土瓶 内面に「長」のマーキング有り	1
2	土瓶胴				10Y6/2		10YR6/3	良好 緻密	肩下に凹線入る 算盤玉型土瓶	2
3	土瓶底		10.0		2.5Y8/2			不良 釉が熔けていない 緻密		1
4	行平蓋				10YR8/2		7.5YR6/4	不良 釉が熔けていない 緻密	表面櫛描文有り	1
5	蓋物蓋	16.2			5Y6/2		2.5Y6/3	良好 緻密	外面に錆絵で字を書く 字の色調=2.5Y3/1	1
6	鉢口縁	20.0			5YR3/1			良好 緻密		1
7	鉢体部						10YR7/4	不良 釉が熔けていない 緻密	外面ミガキあり 厚さ 0.55→1.4cm	2
8	鉢体部				7.5Y6/2			良好 緻密		1
9	鉢底部						7.5YR8/4	不良 緻密		1
10	鉢底部				7.5Y7/2		2.5YR5/4	良好 緻密		1
11	鉢底部				10Y6/2		10YR6/3	良好 緻密	高台内露胎 「長」のマーキング有り 歪みあり 底厚 0.85cm	1
12	鉢底部		8.2		7.5Y5/2		7.5YR5/2	良好 緻密	底部露胎 高台内は茶褐色の顔料塗布 見込みに胎土目、「小豆状」「扇状」の象嵌、「長」のマーキング有り	1
13	鉢体部片									4
14	しのぎ皿		4.9		7.5Y6/2		7.5YR5/4	良好 緻密	畳付 露胎	1
15	播鉢体部片				7.5YR4/2		10YR6/3	良好 緻密	厚さ0.8→1.0cm 外面に「長」のマーキング有り	1
16	不明器種鮫肌体部片				5Y6/2		5Y7/1	良好 緻密	厚さ0.75cm 表面に砂を貼り付け、鮫肌状にする 裏面に「長」のマーキング有り	1
17	足付灯明台	6.0	7.0	4.3	7.5Y7/3			良好 緻密	底部外面に糸切痕 上部に灯明皿が熔着している	1
18	乗燭		3.0		5GY6/1		7.5YR4/4	良好 緻密	底部外面に「長」のマーキング有り	1
19	足付灯明台	7.6			7.5Y6/3			良好 緻密		1

合計 24

採集資料(磁器)

20	染付広東碗		5.3	5.8	10Y7/1	1PB5/4.5	7.5YR8/3	良好 緻密	歪んでいる 内外面 圏線 見込 銘有 外面 浦の苫屋文	1
21	染付広東碗				10Y7/1	2PB3/5		良好 緻密	歪んでいる 内外面 圏線 外面 花文 見込に「長月」のマーキング有り	1
22	染付広東碗底部片				N8/	2.5PB5.5/5.5	7.5YR7/6	良好 緻密	内外面 圏線 見込 降灰有り	1
23	二重格子文広東碗		6.1		2.5GY7/1	7.5B4.5/2.5	7.5YR7/3	良好 緻密	内外面 圏線 見込 銘 斜格子 外面 二重格子 底厚 0.25cm	1
24	二重格子文広東碗		5.6		10Y7/1	7.5B4.5/2.5	2.5GY7/1	良好 緻密	歪んでいる 内外面 圏線 見込 銘 井桁 外面 二重格子 降灰有り	1
25	二重格子文広東碗		5.4		10Y7/1	10BG4/8.5	N9.5/	良好 緻密	歪んでいる 内外面 圏線 見込 銘 千鳥 外面 二重格子 底厚1.1cm	1
26	二重格子文広東碗				10Y7/1	7.5B4.5/2.5	10YR7/3	良好 緻密	歪んでいる 内外面 圏線 外面 二重格子 底厚0.65cm 見込に「長」のマーキング有り	1
27	二重格子文広東碗	14.0			10Y7/1	3PB4/7.5		良好 緻密	歪んでいる 内面 圏線 外面 二重格子 厚さ0.25cm→0.35cm	1
28	二重格子文広東碗				10Y7/1	1.5PB5/6.5		良好 緻密	歪んでいる 内外面 圏線 外面 二重格子	1
29	四重格子文広東碗								外面多重格子文の広東碗と外面椰子葉文の碗、窯壁の剥離片が熔着している。	1
30	蝙蝠文広東碗		5.6		N8/	2.5Y6.5/0.5	7.5YR8/2	良好 緻密	歪んでいる 内面 圏線 見込 銘 蝙蝠 外面 草に蝙蝠 呉須は薄く濁っている 高台高1.0cm	1
31	小広東碗				5GY8/1	1.5PB5/6.5		良好 緻密	歪んでいる 内外面 圏線 秋草文 底厚0.55cm	1

32	染付碗				10Y7/1	N5.5/	10YR8/4	良好 緻密	歪んでいる 内外面 圏線 見込 銘有	1
33	染付碗				10Y8/1	3PB4/7.5		良好 緻密	歪んでいる 内面 多重圏線 外面 二重圏線 水辺文 厚さ 0.2→0.35cm	1
34	染付碗	13.4			N8/	3PB4/10		良好 緻密	内外面 圏線 外面 水辺文	1
35	染付端反碗				2.5GY8/1	2.5B3.5/1.5	10YR8/4	良好 緻密	内面 二重圏線 外面 多重圏線 中位は蔓草文「45.6.26」の赤色マーキング有り	1
36	染付碗				7.5Y8/1	1.5PB5/6.5	7.5YR7/4	良好 緻密	内外面 圏線 内面 蛇目状釉剥 見込 銘有り	1
37	染付碗				10Y8/1	5PB2.5/2		良好 緻密	かなりへたっている 内面 太い圏線 見込 銘有り 外面 菊水文 底厚0.5cm	1
38	二重格子文碗				10Y7/1	7.5B4.5/2.5	2.5GY7/1	良好 緻密	歪んでいる 内外面 圏線 見込 銘 外面 二重格子	1
39	二重格子文碗小片								1点は製品が熔着していて、内面に「47, 6, 24」のマーキング有り 2点は内面に「長」のマーキング有り	7
40	井桁・菱の実文碗		3.7	4.8	10GY8/1	2.5PB4/12	7.5YR7/4	良好 緻密	内外面 圏線 内面 製品熔着「長月」のマーキング有り 外面 井桁・菱の実文	1
41	井桁・菱の実文碗	12.0			N8/	3PB4/7.5		良好 緻密	外面 菱の実文	1
42	井桁・菱の実文碗	12.0			2.5GY7/1	3PB4/7.5		良好 緻密	外面 井桁・菱の実文	1
43	井桁・菱文碗小片									5
44	亀甲文碗		3.8		2.5GY7/1	7.5B4.5/2.5	7.5YR7/4	良好 緻密	内面 圏線 見込 蛇目状釉剥「長月」の赤色マーキング有り 外面 亀甲文	1
45	亀甲文端反碗	12.0			7.5Y7/1	5PB1.5/2		良好 緻密	内面 口縁端部 二重圏線 外面 口縁端部 多重圏線 中位 亀甲文	1
46	亀甲花文碗								歪んでいる 窯道具・製品が熔着 内面に「43.1.16長」のマーキング有り 欠け落ちた小片1点有り	2
47	浦の苫屋文小丸形碗	7.0			2.5Y7/1	5.5PB6.9/5		良好 緻密	内面 口縁端部「47.6.24」のマーキング 外面 浦の苫屋文	1
48	浦の苫屋文端反碗				2.5Y7/1	3PB4/7.5	7.5YR8/2	良好 緻密	内外面 圏線 口縁端部 口鏽 外反 外面 口縁端部 崩れた雷文 中位 浦の苫屋文	1
49	浦の苫屋文碗				10GY8/1	5PB3/4		良好 緻密	内面 圏線「長」のマーキング有り 外面 浦の苫屋文	1
50	浦の苫屋文碗				10GY8/1	5PB3/4		良好 緻密	内面 圏線 外面 浦の苫屋文	1
51	浦の苫屋文碗								内外面 圏線 製品が熔着している	1
52	浦の苫屋文碗		4.5		10Y7/1	7.5PB1.5/2	7.5YR8/2	良好 緻密	内外面 圏線 見込 銘 帆掛舟 外面 浦の苫屋文	1
53	浦の苫屋文碗小片								4点ともへたっている	4
54	幅広葉+梅花文端反碗	10.2		6.7	10GY8/1	1PB5/4.5	7.5YR8/2	良好 緻密	内外面 圏線 見込 銘 千鳥「長月」の書込 外面 幅広葉+梅花文 口縁端部微妙な端反り	1
55	椰子葉文碗小片									3
56	縫糸文端反碗	13.4		6.3	10Y7/1	10BG4/8.5	7.5YR8/2	良好 緻密	内外面 圏線 内面「長月」「43.1.16」のマーキング 外面 縫糸文 宝珠	1
57	縫糸文端反碗									3
58	蝙蝠文端反碗				2.5GY8/1	3PB4/7.5	7.5YR8/2	良好 緻密	内面 圏線 銘 蝙蝠 外面 柳に蝙蝠 口縁端部やや端反る	1
59	蝙蝠文端反碗								へたっている 内面 圏線「長月」の書込 外面 椰子葉に蝙蝠	1
60	傘文端反碗	11.0			N8/	3PB4/7.5		良好 緻密	外面 傘 口縁端部やや端反る	1
61	傘文碗小片				N9/	3PB4/7.5			外面 傘	2
62	染付碗		3.75		N8/	7.5B4.5/2.5	5YR6/4	良好 緻密	内面 圏線 見込みに蛇目状釉剥有り	1
63	染付碗				5Y8/1	5PB3/4		良好 緻密	歪んでいる 内面に熔着痕有り 内外面 圏線 外面丸文	1
64	染付端反碗(窓絵)				10Y8/1	2.5PB5.5/5.5		良好 緻密	内外面 圏線 内面 降灰有り 外面 窓絵	1
65	染付端反碗				N8/	2.5GY5/1		良好 緻密	内外面 圏線 外面 口縁端部 多重圏線	1
66	染付網目碗				2.5GY8/1	2.5PB5.5/5.5		良好 緻密	厚さ 0.25→0.55cm	1
67	染付碗				2.5Y8/2		7.5YR7/6	不良 緻密	内面 見込 蛇目状釉剥 焼が熔けていない 釉に指痕有り	1
68	染付深小丸形碗			5.75	2.5GY7/1	3PB4/7.5	7.5YR6/6	良好 緻密	外面 鳥籠に秋草文様	1

69	染付深小丸形碗	7.0			N8/	5PB3/4		良好 緻密	内外面 圏線 内面に降物熔着 外面 花文 厚さ 0.25→0.55cm	1
70	染付深小丸形碗	7.0			N8/	5PB3/4		良好 緻密	歪んでいる 内外面 圏線 内面「長月」の書込 外面 花文「寺」字有り	2
71	染付端反碗		3.5		N8/	2.5B3.5/1.5	10YR7/3	良好 緻密	内外面 圏線 見込 銘 内面 口縁口錆の製品熔着	1
72	染付端反碗	9.6			2.5GY8/1	7.5B4.5/2.5		良好 緻密	かなり歪んでいる 内外面 圏線 内面「47.6.24」の赤色マーキング有り 外面 葉文	1
73	染付端反碗				5Y8/2	5PB3/4		良好 緻密	歪んでいる 内面口縁端部 圏線 外面 太い圏線 斜めの暦文風の文様 厚さ0.2→0.45cm	1
74	染付碗小片				N8/	2PB3/5		良好 緻密	歪んでいる 内面 圏線 外面 網目文 厚さ0.25→0.45cm	1
75	染付朝顔型碗				2.5Y8/2	2.5PB5.5/5.5	7.5YR7/6	良好 緻密	内面 銘 降灰有り 外面 圏線	1
76	染付端反碗				2.5Y8/2	5PB2.5/2	10Y8/1	良好 緻密	内面 太い圏線 見込みに銘(井桁) 外面 縫糸文 鳳凰文	1
77	染付端反碗		3.6	5.7	5Y7/2	7.5B2/3	5Y7/2	良好 緻密	内面 圏線 見込 銘「長月」のマーキング有り 外面 圏線 簾文	1
78	染付端反碗				N8/	2.5B3.5/1.5		良好 緻密	歪んでいる 内面 圏線 秋草 花格子 外面 圏線 唐草文	1
79	染付端反碗					5.5PB6.9/5		良好 緻密	内外面 圏線 外面 竹に蝙蝠文	1
80	染付稜花碗				5Y7/2	7.5B4.5/2.5		良好 緻密	歪みあり 内面 呉須を塗りつぶす 底厚 0.45cm	1
81	染付網目文碗				5Y7/1	2.5B3.5/1.5		良好 緻密	内外面 圏線 外面 網目文	1
82	染付網目文碗					5.5PB6.9/5		良好 緻密	内外面 圏線 外面 圏線 網目文	2
83	染付碗小片							良好 緻密		14
84	染付広東碗蓋	9.6	4.7	2.35	N8/	2.5PB5.5/5.5	N8/	良好 緻密	内面 圏線 銘 蕨 外面 圏線 雪持笹 銘 蕨	1
85	染付広東碗蓋					2.5B3.5/1.5			へたっている 内面 圏線 銘 宝珠 外面 鯛 七宝	1
86	染付広東碗蓋					3PB4/10			内面 圏線 銘 花 外面 圏線 梅文 つまみ内側に「長月」のマーキング有り	1
87	波佐見風染付深皿				2.5GY7/1	2.5B3.5/1.5		良好 緻密	内面 芭蕉 外面 竜唐草 畳付 露胎	1
88	波佐見風染付深皿	12.8			2.5GY7/1	2.5B3.5/1.5		良好 緻密	内面 草花文 見込 五弁花 外面 竜唐草 銘 渦「50.10.7」のマーキング有り	1
89	染付深皿					2.5B3.5/1.5		良好 緻密	へたっている 製品が熔着している「47.6.24」の赤色マーキング有り	1
90	染付雲文深皿	14.0			5Y7/1	4B4/6	5Y7/1	良好 緻密	内面 圏線 雲文	1
91	よろけ縞文深皿			3.6	10Y7/1	7.5B4.5/2.5	10Y7/1	やや悪い 緻密	内面 圏線 よろけ縞 草文 外面 雲文 底部外面 蛇目状露胎	1
92	よろけ縞文皿				10Y7/1	7.5B4.5/2.5	10Y7/1	良好 緻密	内面 よろけ縞 放射状文 見込 銘 底部外面 蛇目釉剥「長」の赤色マーキング有り	1
93	染付深皿				N8/	4.5PB3/7	7.5YR8/2	良好 緻密	底部外面 蛇目釉剥 へたっている	1
94	井桁文深皿	14.0			N8/	5.5PB6.9/5		良好 緻密	外面 井桁文 内面 剥がれ有り	1
95	笹文深皿								へたっている 1点の外面に「47.6.26」の赤色マーキング有り	3
96	楼閣文深皿		7.8		10Y8/1	5.5PB6.9/5	7.5YR8/2	良好 緻密	内面 楼閣文 外面 唐草 外面底部高台内 蛇目釉剥 中央に「長」の赤色マーキング有り	1
97	雪持笹文深皿		7.5		7.5Y7/1	2.5BG2.5/2.5	N8/	良好 緻密	内面 見込 雪持笹 口縁 笹文 外面底部高台内 蛇目釉剥 ハマ熔着痕有	1
98	芙蓉文深皿					5PB3/4		良好 緻密	へたっている 内面 芙蓉文 外面底部高台内 蛇目釉剥「長月」のマーキング有り	1
99	浦の苫屋文深皿		7.0		7.5Y7/1	2.5B3.5/1.5	7.5Y7/1	良好 緻密	内面 浦の苫屋文 圏線 外面 底部高台内 蛇目釉剥	1
100	浦の苫屋文深皿				10Y8/1	4.5PB3/7	10Y8/1	良好 緻密	内面 浦の苫屋文 外面 輪違い文 底部高台内 蛇目釉剥	1
101	浦の苫屋文深皿	12.4			N8/	2.5PB6.2/7	7.5YR8/2	良好 緻密	口縁端部 口錆 内面 浦の苫屋文 外面 唐草 底部高台内 蛇目釉剥	1
102	浦の苫屋文深皿	13.2			N8/	5PB2.5/2	7.5YR8/2	良好 緻密	口縁端部 口錆 内面 浦の苫屋文 足付ハマの痕有 外面口縁 折松葉 底部高台内 蛇目釉剥	1
103	浦の苫屋文深皿				N8/	7.5B4.5/2.5	7.5YR8/2	良好 緻密	内面 浦の苫屋文 底部高台内 蛇目釉剥	1
104	浦の苫屋文深皿	12.0		3.7	N8/	2.5PB5.5/5.5	5YR8/4	良好 緻密	口縁端部 口錆 内面 浦の苫屋文 外面 口縁部 折松葉 高台内 蛇目釉剥 端反皿	1
105	浦の苫屋文深皿	13.2		4.2	7.5Y7/1	2PB3/5	7.5Y7/1	良好 緻密	口縁端部 口錆 内面 浦の苫屋文 外面 口縁部 折松葉 底部高台内 蛇目釉剥 端反皿	1

106	浦の苔屋文皿	14.0		3.8	N8/	2PB3/5	7.5Y7/1	良好 緻密	口縁端部がつまみ出される 内面 浦の苔屋文 外面 竜唐草 高台内 蛇目釉剥 端反皿	1
107	浦の苔屋文皿	14.4		3.5						12
108	唐草文深皿				7.5Y7/1	2.5B3.5/1.5		良好 緻密	外面 竜唐草	1
109	唐草文深皿								口縁端部 口鏝 内面 口縁 花文 銘あり 外面 口縁部 竜唐草 底部高台内 蛇目釉剥 染付片熔着「44.6.24」の赤色マーキングあり	2
110	二重格子文深皿				N8/	2.5PB6.2/7	N8/	良好 緻密	内面 格子文 外面 竜唐草	1
111	二重格子文深皿							良好 緻密	「47.6.24」「47.6.25」の赤色マーキング	4
112	葉文深皿	14.4			N8/	2PB3/5		良好 緻密	口縁端部 口鏝 内面 葉文 外面 唐草「長月」のマーキング有り	1
113	染付輪花深皿	14.0	8.1	4.9	2.5GY8/1	2PB3/5	5YR7/4	良好 緻密	やや歪んでいる 口縁端部 口鏝 内面 製品熔着 浦の苔屋文 帆掛舟 富士山 底部高台内 蛇目釉剥「長月」のマーキング有り	1
114	染付輪花深皿	13.6			7.5GY8/1	2PB3/5	5YR7/4	良好 緻密	内面 浦の苔屋文 外面 竜唐草「44.6.25」「長月」の赤色マーキング 底部高台内 蛇目釉剥	1
115	染付輪花深皿	12.0		4.25	N8/	2PB3/5	2.5Y8/2	良好 緻密	口縁端部 口鏝 内面 浦の苔屋文 外面 竜唐草 高台内 蛇目釉剥	1
116	染付輪花深皿	13.4			N8/	1.5PB5/6.5	2.5Y8/2	良好 緻密	口縁端部 口鏝 内面 浦の苔屋文 外面 竜唐草	1
117	染付輪花深皿	12.5			N8/	2PB3/5	2.5Y8/2	良好 緻密	口縁端部 口鏝 内面 浦の苔屋文 外面 竜唐草	1
118	染付輪花深皿	13.6		4.2	N8/	2PB3/5	2.5Y8/2	良好 緻密	口縁端部 口鏝 内面 浦の苔屋文 外面 竜唐草 底部高台内 蛇目釉剥	1
119	染付ひだ小皿	9.5	3.8	2.25	10Y8/1	5PB1.5/2	5YR7/4	良好 緻密	口縁端部 口鏝 内面 梅文 高台畳付 露胎	1
120	染付ひだ小皿		3.8		10Y8/1	5PB1.5/2	5YR7/4	良好 緻密	口縁端部 内面 梅文 高台畳付 露胎	1
121	染付輪花小皿				5GY8/1	2.5B3.5/1.5	5YR7/8	良好 緻密	口縁が歪んでいる 内面 銘 高台畳付 露胎	1
122	白磁輪花小皿				5GY8/1		N8/	良好 緻密	高台畳付 露胎	1
123	染付羽花小皿	8.1		2.1	5GY8/1		10YR8/4	良好 緻密	底部高台内 蛇目釉剥	1
124	染付輪花深皿片							良好 緻密		10
125	染付皿小片							良好 緻密		2
126	染付八角鉢				N8/	2.5B3.5/1.5		良好 緻密	歪んでいる 内面 縞 外面 菱の突・梅文 文様 芙蓉手状	1
127	染付八角鉢					5.3PB3/4		良好 緻密	内面 見込 傘文様 窯道具(円盤)・製品熔着 口縁部 芙蓉手状	1
128	染付六角小鉢				N8/	2.5PB5.5/5.5	10YR8/3	良好 緻密	内面 浦の苔屋文 外面 遠山文 口縁は少し稜花気味	1
129	白磁鉢				2.5Y7/1			良好 緻密	口縁端部に水平面を持つ	1
130	染付銚子				10Y7/1	2.5B3.5/1.5		良好 緻密	外面 肩に草文を描く	1
131	白磁徳利	4.0			N8/			良好 緻密	口縁端部が肥厚している	1
132	染付徳利		7.0		10Y7/1	2.5B3.5/1.5	7.5YR6/3	良好 緻密	外面に太い圈線を描く	1
133	青磁花瓶	8.8			7.5G6.5/4	2.5B6.5/5.5		良好 緻密	口縁端部が上方に摘み上げられる	1
134	御神酒徳利	1.7			N8/	5.5PB6.9/5		良好 緻密	外面「奉献」字 裏面「44.6.25」のマーキング	1
135	御神酒徳利				N8/	2.5PB4/12		良好 緻密	外面「奉」の字 下に宝珠描く 畳付露胎	1
136	御神酒徳利				N8/		7.5YR6/3	良好 緻密	畳付露胎	1
137	御神酒徳利							良好 緻密	広東碗と熔着している	1
138	染付香炉	9.6				3PB4/7.5	10YR7/2	良好 緻密	体部内面 露胎 外面 草文	1
139	つぼつぼ				5YR7/4			良好 緻密	釉は肩に少しかかる 白濁している	1
140	花立	2.4	5.0	9.6	5Y7/2			良好 緻密	完形品 無釉	1
141	染付小片							良好 緻密		15
142	陶石									1

伝世資料

1	蕎麦猪口	8.0	6.0	6.4	5GY8/1	7.5B2/3	10YR8/2	良	緻密	内面 四方襷 見込 傘の銘 外面 体部 松竹梅 鶴 底部 蛇目状釉剥	1
2	三重格子文端反碗	10.0	3.7	6.0	5GY8/1	3PB4/7.5	7.5YR7/4	良	緻密	内面 圏線 見込 銘 外面 圏線 三重格子文 畳付 露胎	1
3	裏の苫屋文稜花小皿	9.15	5.1	2.35	5GY8/1	2PB2/4	10YR8/1	良	緻密	口縁端部 口鏝 稜は12 内面 浦の苫屋文 畳付 露胎	1
4	裏の苫屋文稜花小皿	9.1	4.9	2.25	5GY8/1	2PB2/4	10YR8/1	良	緻密	法量・文様3とほぼ同じ	1
5	裏の苫屋文稜花小皿	9.1	5.0	2.2	5GY8/1	2PB2/4	10YR8/1	良	緻密	法量・文様4とほぼ同じ	1
6	裏の苫屋文稜花小皿	9.1	5.1	2.3	5GY8/1	2PB2/4	10YR8/1	良	緻密	法量・文様5とほぼ同じ	1
7	裏の苫屋文稜花小皿	9.1	4.9	2.25	5GY8/1	2PB2/4	10YR8/1	良	緻密	法量・文様6とほぼ同じ	1
8	裏の苫屋文稜花小皿	10.5	5.9	2.25	5GY8/1	5PB3/4	10YR8/2	良	緻密	口縁端部 口鏝 稜は16 内面 裏の苫屋文 畳付 露胎	1
9	裏の苫屋文稜花小皿	10.3	6.1	2.15	5GY8/1	5PB3/4	10YR8/2	良	緻密	法量・文様6とほぼ同じ	1
10	裏の苫屋文稜花小皿	10.1	5.9	1.85	7.5GY8/1	2PB2/4	10YR8/2	良	緻密	法量・文様6とほぼ同じ	1
11	裏の苫屋文稜花皿	13.0	7.9	3.6	2.5GY8/1	5PB3/4	5YR6/4	良	緻密	口縁端部 口鏝 稜は16 内面 裏の苫屋文 外面 底部 蛇目状釉剥	1
12	裏の苫屋文稜花皿	12.9	7.5	3.55	2.5GY8/1	5PB3/4	5YR6/4	良	緻密	法量・文様6とほぼ同じ	1
13	裏の苫屋文稜花皿	13.0	7.5	3.55	2.5GY8/1	5PB3/4	5YR6/4	良	緻密	法量・文様6とほぼ同じ	1
14	五弁花墨弾き皿	17.0	10.8	3.15	7.5GY8/1	5.5PB6.9/5	2.5Y8/1	良	緻密	内面 圏線 雲 墨弾き 底部 五弁花 降灰有り 外面 圏線 竜唐草 畳付 露胎 高台内 足付 ハマの痕 三箇所	1
15	五弁花墨弾き皿	17.1	10.5	3.0	7.5GY8/1	5.5PB6.9/5	2.5Y8/1	良	緻密	法量・文様6とほぼ同じ	1
16	五弁花墨弾き皿	17.0	10.5	3.15	7.5GY8/1	5.5PB6.9/5	2.5Y8/1	良	緻密	法量・文様6とほぼ同じ	1
17	五弁花墨弾き皿	16.9	10.3	3.05	7.5GY8/1	5.5PB6.9/5	2.5Y8/1	良	緻密	法量・文様6とほぼ同じ	1
18	五弁花墨弾き皿	16.9	10.4	3.15	7.5GY8/1	5.5PB6.9/5	2.5Y8/1	良	緻密	法量・文様6とほぼ同じ	1
19	水注	5.3	7.0	17.3	N9.5/	2PB5.5/5.5	2.5Y6/3	良	緻密	外面 不透明釉が体部過半まで掛る 肩部に垣根と草文	1
20	染付油壺	1.9	3.7	7.5	7.5Y6/1	10Y4.5/0.8	5YR5/2	良	緻密	外面 肩部に梅文	1
21	白磁徳利	4.0	6.1	18.7	2.5GY7/1		2.5Y8/2	良	緻密	外面 畳付露胎	1
22	染付徳利	4.6	8.5	25.0	5GY7/1		7.5B4.5/2.5	良	緻密	外面 圏線 肩部に梅 体部に竹石 畳付 露胎 底に割れあり 漏れる	1
23	白磁大徳利	4.8	10.3	37.1	5GY7/1		10YR6/4	良	緻密	外面 施釉 畳付露胎	1
24	染付大徳利	5.8	12.5	43.6	5GY7/1	2PB2/4	5GY7/1	良	緻密	外面 胴部に「長月村」反対側に「柘田姓」の文字有り 畳付 露胎 ひびを修復	1

合計 24

御荘焼長月窯資料一覧表(愛南町教委蔵1)

窯道具

実測番号	遺物名	法量(cm)					特徴			形状	個数
		口(上)径	底(下)径	胴径	高さ	厚さ	色調	焼成	胎土		
1	ツク	10.0					5YR5/2	良好	5mm以下の砂粒を含む	エンタシス形 上部に径7.0cmの高台痕有り	1
2	ナンキン		9.1				7.5YR5/4	良好	3mm以下の砂粒を含む	底部に熔着痕がある 脚部内面は割りぬいている。	1
3	ナンキン	6.4	4.1	5.3	6.7		2.5YR5/2	良好	3mm以下の砂粒を含む	脚底を少し挟る 上端にアルミナ状の泥を塗る 底部に石付着	1
4	ナンキン	4.0	5.8		8.0		2.5YR5/2	良好	緻密	底部に熔着痕がある。脚部内面は割りぬいている。	1

小計 4

	最大長	足長	穴径	穴深	高さ						
5	蛸足ハマ(4足)	25.0	10.0	2.7	0.95	4.25	10R3/3	良好	0.5cmの砂粒を含む	脚部の下部と中央の窪みに布目痕残る 上部中央に径5.8cm熔着痕有り 脚端に径4.0cmの高台痕有り下部に径10.5cmの重ね焼痕有り 上下にアルミナ状の泥が付着	1

小計 1

	口(上)径	底(下)径	足高	高さ	厚さ						
6	ハマ	10.8	5.0		1.5	0.85	5YR5/3	良好	緻密 磁器質	上面 アルミナ状の泥を塗る 7.0cmの高台痕有り 底部に熔着痕有り	1
7	ハマ	7.5	4.3		1.6	1.0	7.5YR5/6	良好	1mm以下の砂粒を含む	上面 アルミナ状の泥を塗る 5.5cmの高台痕有り 底部に熔着痕有り	1
8	ハマ	7.3	4.1		1.3	0.45	10YR6/3	良好	1mm以下の砂粒を含む	上面に5.1cmの高台痕有り	1
9	ハマ	6.9	4.1		1.25	0.65	7.5YR5/2	良好	4mm以下の砂粒を含む	上面に5.3cmの高台痕有り	1
10	ハマ	6.4	3.8		1.15	0.75	10YR7/4	良好	1mm以下の砂粒を含む	上部に3.0cmの高台痕有り	1
11	ハマ	6.2	3.6		1.65	0.95	7.5YR7/4	良好	2mm以下の砂粒を含む	上面 アルミナ状の泥を塗る	1
12	ハマ	6.0	2.9		1.15	0.55	7.5YR5/2	良好	1mm以下の砂粒を含む	上部に4.0cmの高台痕有り	1
13	ハマ	5.75	3.1		1.3	0.85	2.5Y7/1	良好	1mm以下の砂粒を含む		1
14	ハマ	6.3	3.1		0.9	0.45	7.5YR5/2	良好	緻密	上面に4.3cmの高台痕があるが、中心からずれている	1
15	足付ハマ	6.1	1.9		1.3	0.95	10YR6/4	良好	1mm以下の砂粒を含む	上面に径3.3、深さ0.3cmの窪み有り 底部に針ピンの剥がれた痕が9カ所ある	1
16	円盤	6.0	6.0			1.65	7.5YR8/4	良好	5mm以下の砂粒を含む	手づくね成形 上面に5.3cmの高台痕有り 下面に砂付着 磁器質	1
17	円盤	5.3	5.6			0.55	7.5YR5/2	良好	1mm以下の砂粒を含む	手づくね成形 形が正円でなくやや楕円気味 上面に径3.3cmの高台痕残る 下面にアルミナ状泥を塗る	1
18	円盤	5.1	5.1			0.3	10YR5/2	良好	1mm以下の砂粒を含む	手づくね成形 上面に径4.4cmの高台痕残る 両面にアルミナ状の泥を塗る	1
19	円盤	5.6	5.5			0.55	10YR5/2	良好	1mm以下の砂粒を含む	手づくね成形 形が正円でなくやや楕円気味 上面に径3.5cmの高台痕残る 両面にアルミナ状泥を塗る	1
20	円盤	5.4	5.4			0.55	7.5YR5/2	良好	1mm以下の砂粒を含む	手づくね成形 形が正円でなくやや楕円気味 上面に径4.0cmの高台痕残る 両面にアルミナ状泥を塗る	1

小計 15

21	窯壁									内面がガラス化している	1
22	窯壁									内面がガラス化している	1
23	窯壁										1

小計 3

総計 19

御荘焼長月窯資料一覧表(愛南町教委蔵1)

製品 陶器

実測番号	遺物名	法量(cm)			色調			焼成 胎土	形状	個数
		高台径	器高		釉の上から	断面	露胎			
24	土瓶把手				10Y6/2	5Y8/1	7.5Y6/4	良好 緻密	全長 2.0 幅 4.1 つる穴 0.6-0.3cm	1
25	乗燭		2.9		10Y6/2	2.5Y7/2	5YR5/4	良好 緻密 貫入有り	上部 脚部中程まで施釉	1
26	陶器大鉢		9.7		2.5Y7/1	2.5Y6/3	2.5Y6/2	良好 釉がよく熔けている 緻密	見込 砂胎土目有り 底部 露胎	1

合計 3

製品 磁器

実測番号	遺物名	法量(cm)			釉の上から	呉須	露胎	焼成 胎土	形状	個数
		高台径	器高							
27	染付端反碗	11.8	4.3	5.95	10Y8/1	2PB3/5	10YR8/4	良好 緻密	内面 見込 蛇目釉剥 外面 井桁 菱文 畳付露胎	1
28	染付端反碗		4.2	5.9	10Y8/1	2.5B3.5/1.5	10YR8/4	良好 緻密	内面 圏線 外面 帆掛舟 海辺 高台 畳付露胎	1
29	染付碗		4.8		10Y8/1	2PB3/5	10YR8/4	良好 緻密	内面 圏線 銘有り 降灰有り 外面 亀甲文 圏線 高台 畳付露胎	1
30	幅広葉+梅花文端反碗		4.4		2.5Y8/2	10YR4/2	10YR8/4	不良 釉熔けず柔らかい 緻密	内面 圏線 銘有り 外面 幅広葉+梅花文 梅文 圏線 底部外面 露胎	1
31	染付碗		5.0		7.5YR8/3			不良 釉は落ちて 柔らかい 緻密	外面 高台脇 高台内に熔けていない釉残る	1
32	染付碗				7.5Y8/1	7.5B4.5/2.5	7.5YR7/4	不良 釉は白濁し、ブクがある 緻密	内面 圏線 見込 蛇目釉剥 外面 圏線 亀甲文 畳付露胎	1
33	染付碗		4.2		5Y8/1	2.5B3.5/1.5	7.5YR8/2	不良 釉は白濁し、ブクがある 緻密	内面 圏線 外面 圏線 不明文 畳付露胎	1
34	染付朝顔形碗		3.5		2.5GY7/1	2PB3/5	10YR7/4	良好 緻密	底部と口縁部の境に稜を持つ 外面 圏線 不明文 高台 畳付露胎	1
35	染付碗端反碗	12.0			7.5GY8/1	2.5B3.5/1.5		良好 緻密	内面 圏線 外面 浦の苫屋文 内面に同形の染付碗が熔着	1
36	染付碗端反碗		3.6	5.95	5GY8/1	2PB2/4	10YR8/3	良好 緻密	内面 圏線 見込に銘有り 降灰有り 外面 圏線と二重線で4区画され網目文様と水車文2種が交互に描かれる 高台 畳付露胎	1
37	染付端反碗		4.2	5.7	2.5GY8/1	7.5B4.5/2.5	5YR7/4	不良 釉は白濁し、ブクがある 緻密	内面 圏線 銘有り 外面 圏線 松林 窓絵 高台 畳付露胎	1
38	染付椰子葉文端反碗				7.5Y8/1	7.5B4.5/2.5		不良 釉は白濁する 緻密	内面 圏線 外面 口縁端部 筋文 口縁部 羊歯文 圏線	1
39	染付碗			5.5	7.5Y7/1	2.5B3.5/1.5	7.5YR7/3	良好 緻密	内面 見込 蛇目状釉剥 外面 菱の実文 熔着痕有り 高台 畳付露胎	1
40	染付碗底部片				5GY8/1	2PB2/4	7.5YR7/3	良好 緻密	内面 見込 蛇目状釉剥 外面 多重圏線 釉剥げ有り 高台 畳付露胎	1
41	染付碗口縁片				5GY8/1	5PB2.5/2		良好 緻密	内面 圏線 外面 圏線 蝶文	1
42	染付碗				7.5B7.5/0.5	2PB2/4		良好 緻密	歪みが大きい 内面 圏線 外面 帆掛舟	1
43	染付蓋		3.9	3.25	7.5Y7/1	2.5GY5/1	N8/	良好 緻密	内面 圏線 中央に銘有り 陶磁片熔着 外面 圏線 幅広葉+梅花文 摘みの先端部露胎	1
44	染付深皿	12.2	6.9		10YR8/2	7.5B4.5/2.5		不良 釉は白濁する 緻密	内面 圏線 草花文	1
45	染付輪花深皿	12.7	7.0	3.1	7.5Y7/1	7.5B2/3		良好 緻密	口縁端部 口紅 内面 見込 浦の苫屋文 外面 高台内 蛇目釉剥してからアルミナ状の釉塗られる ワドチの痕有り	1
46	染付深皿				5GY7/1	7.5B4.5/2.5	2.5Y8/1	良好 緻密	内面 見込 不明文 外面 高台内 蛇目状露胎	1
47	染付輪花深皿				5GY8/1	7.5B4.5/2.5	10YR8/3	良好 緻密	内面 降灰有り 圏線 見込 草花文 口縁 笹文 圏線 高台内 蛇目釉剥後、アルミナ状の泥塗布 砂付着	1
48	染付小片							良好 緻密		9

合計 30

御荘焼長月窯資料一覧表(愛南町教委蔵2 ダンボール箱)

窯道具

番号	遺物名	法量(cm)					特徴			その他	個数
		口(上)径	底(下)径	胴径	高さ	厚さ	色調	焼成	胎土		
1	ツク	10.3					7.5YR4/2	良好	5mm以下の砂粒を含む	エンタシス形 上部の側面、上面の一部にアルミナ状泥塗布	1

小計 1

番号	遺物名	法量(cm)					特徴			その他	個数
		足長	穴径	穴深	高さ	厚さ	色調	焼成	胎土		
2	蛸足ハマ(4足)	9.9	3.0	1.1	4.25	-	5YR3/2	良好	0.5cmの砂粒を含む	下部と穴に布目痕残る(尾根以外) 上部縁辺に削り有り 上部中央に径8.0cmの熔着痕有り 上部脚端に径5.6cmの高台痕有り 下部に径10.0cmの重ね焼痕有り	1

小計 1

番号	遺物名	法量(cm)					特徴			その他	個数
		口(上)径	底(下)径	足高	高さ	厚さ	色調	焼成	胎土		
3	ハマ	7.8	4.1		1.65	0.95	7.5YR5/3	良好	2mm以下の砂粒を含む	上面 アルミナ状の泥を塗る 径4.0cmの高台痕有り 底部に熔着痕有り	1
4	ハマ	7.6	4.0		1.5	0.9	7.5YR5/4	良好	1mm以下の砂粒を含む	上面 アルミナ状の泥を塗る 径4.5cmの高台痕有り 底部に熔着痕有り	1

小計 2

窯壁

5	窯壁									内面がガラス化している	1
---	----	--	--	--	--	--	--	--	--	-------------	---

小計 1

磁器

番号	遺物名	法量(cm)			色調			焼成	胎土	その他	個数
		口径	高台径	器高	釉の上から	呉須	露胎				
6	染付端反碗	11.1	3.9	5.70	10Y8/1	2PB3/5	7.5YR7/6	良好	緻密	釉厚い 内面 熔着痕有り 見込 蛇目釉剥ぎ 高台痕有り 外面に(井桁3 菱の実文1)が2セット描かれる 畳付露胎	1
7	染付碗		4.15		7.5GY8/1	2PB3/5	10YR8/4	良好	緻密	口縁部が歪んでいる 内面 口縁端部 二重圏線 見込 圏線 降灰があり、染付片が熔着している 外面 圏線 浦の苫屋文展開 高台 圏線 畳付露胎	1
8	染付碗				7.5GY8/1	2PB3/5	10YR8/3	良好	緻密	底部のみ ひどく歪んで 潰れている 内面 圏線 銘有り 降灰有り 外面 浦の苫屋文 圏線 高台 畳付露胎	1
9	染付碗				10YR8/4	10YR4/1		不良 釉は熔けず 柔らかい	緻密	内面 見込 銘有り 外面 草花文 高台 二重圏線	1
10	染付深皿				5GY8/1	2PB3/5	7.5Y7/1	良好	緻密	口縁端部 口錆 内面 圏線 二重格子文 見込 草花文 外面 折れ松葉 高台内 蛇目釉剥 フドチの痕有り	1
11	染付輪花深皿				7.5GY8/1	2PB3/5	10YR8/4	良好	緻密	口縁部 ひどく歪んでいる 内面 口縁部 圏線 笹文 崩れた草花文 見込 圏線 草花文 足付ハマの足2個熔着 染付片 熔着 アルミナ状泥 少し付着 外面 折れ松葉文 高台内 蛇目状露胎	1
12	染付深皿				5GY8/1	2PB3/5	7.5Y8/1	良好	緻密	内面 見込 浦の苫屋文 染付片 熔着 外面 高台内 蛇目釉剥	1
13	染付深皿				5GY8/1	2PB3/5		良好	緻密	口縁は歪んでいる 内面 口縁端部 圏線 外面 浦の苫屋文	1

小計 8

総計 13